古典史料から読み解く：唐代初期の軍事アクション比較解説

1. 序文：軍事用語の峻別が歴史理解を深める

史料に登場する「襲う」「攻む」「寇す」といった言葉は、現代では似た意味に捉えられがちですが、当時の文脈では作戦の目的や勢力の性質によって明確に使い分けられていました。これらの言葉を峻別することは、単に記述を追うだけでなく、当時の指揮官がどのような意図を持って兵を動かしたのか、その背後にある政治的・戦略的な力学を読み解く鍵となります。本資料では、学習の全体像として以下の4つの主要概念を定義します。

- **寇す（こうす）** ： 国境を越えて領土に侵入し、攪乱や偵察、政治的挑発を行う行為。
- **攻む（せむ）** ： 城郭や門などの特定の拠点を標的とし、正面から物理的に奪取・包囲する行為。
- **襲う（おそう）** ： 夜襲や奇襲、背後への掩撃など、敵の備えがない状態を突く機動的な攻撃。
- **抄掠（しょうりゃく）** ： 戦闘そのものより、人畜や物資を奪うという「実利的な獲得」に特化した行為。これらの用語の違いを理解することで、史料の断片的な記述から指揮官の緻密な思惑や、戦況がもたらす政治的影響を鮮明にイメージできるようになります。まずは、国境を脅かす「侵入者」の動きを表す「寇す」という言葉から見ていきましょう。

2. 「寇す（こうす）」：境界を越える侵入と攪乱

「寇す」は、主に突厥（とっけつ）のような異民族や、梁師都（りょうしと）、劉武周（りゅうぶしゅう）といった唐に敵対する割拠勢力が、国境や州県という境界を越えて侵入する様子を指します。このアクションには、ソースコンテキストに基づき以下の3つの特徴が見て取れます。

1. **国境侵犯と攪乱** ： 「稽胡、富平に寇す」といった記述に代表されるように、組織的な軍勢が他勢力の領土に足を踏み入れ、地域全体を揺さぶる動作です。
2. **実利的な略奪** ： 単なる占領ではなく、人や物資を奪うニュアンスが含まれます。突厥が涼州を「寇」した際には、男女数千人を掠めて去ったと記録されています。
3. **政治的工作・挑発** ： 軍事行動を政治的示威に利用する側面もあります。王世充が新安を「寇」した事例では、外部には攻撃の姿勢（攻取）を見せつつ、内部では禅譲（帝位の譲渡）の相談を進めるという、実利以外の工作に利用されました。また、梁師都が霊州を繰り返し寇した際、唐の驃騎将軍・藺興粲（りんこうさん）や長史・楊則（ようそく）によって撃退された記録が残っています。こうした防衛側の対応を含め、「寇」は国境付近の緊張状態を象徴する言葉と言えます。

2.1. 深掘り事例：李元吉の「寇を試みしむ」とその悲劇

「寇す」という言葉には、本格的な侵攻の前段階として敵の戦力を計る「偵察」のニュアンスが含まれることがあります。史料では、この試行的な侵入を「寇を試（こころ）みしむ」、あるいは「嘗（な）める」という字を用いた「寇を嘗みしむ」と表現しており、文字

通り「敵の出方を味わう（探る）」意図が強調されています。**斉王・李元吉による無謀な命令（619年）**

- **無謀な命令** ： 劉武周の軍勢が黄蛇嶺に迫った際、太原を守る李元吉は、部下の張達に対し「わずか歩卒百人」で敵地に侵入（寇を試みしむ）し、偵察を行うよう命じました。
- **張達の反論** ： 張達は、この命令に対し「兵が少なすぎて、死にに行くようなものです」と強く反対し、出撃を辞退しました。しかし、李元吉はこれを無理強いし、張達を戦地へ送り出しました。
- **悲劇的な結末** ： 案の定、百人の歩卒は敵の大軍に飲み込まれ、全員が戦死または捕虜となりました。この無謀な判断で部下を失った張達は李元吉を深く恨み（忿恨）、後に劉武周を導いて楡次（ゆじ）を襲わせるという報復的な裏切りを招くことになったのです。**ここがポイント！** 無理な偵察（寇を試みしむ）は、戦力としての機能を果たさないだけでなく、 **現場の反発を無視することで指揮官への信頼を破壊し、組織の崩壊（裏切り）という致命的な結果を招く** という軍事上の教訓を示しています。「寇す」が広域的な攪乱や偵察を指すのに対し、特定の地点を力ずくで奪う行為はどのように表現されたのでしょうか。

3. 「攻む（せむ）」：拠点を狙う物理的奪取と包囲

「攻む」という言葉は、城郭、城門、砦といった「特定のポイント」を標的にした、計画的かつ組織的な正面攻撃を指します。

- **具体的な拠点の攻略** ： 沈法興が余杭や丹楊などの都市を陥落させた際や、李子通が江都を攻略した際に使われます。また、クーデターにおいて王世充が「太陽門」などの特定の門を力ずくで突破しようとする場面でもこの言葉が選ばれます。
- **長期の包囲戦（攻城戦）** ： 李神通が聊城を包囲し、敵が飢餓に陥るまで攻め立てるような、腰を据えた包囲攻撃を指します。
- **攻具（こうぐ）の使用** ： 衝車（城門を破る車）や梯子などの「攻具を成して然る後進まん」という記述があるように、物理的な破壊手段を準備して挑む正面突破を意味します。一方で、正面攻撃は常に困難が伴います。宇文化及が魏州を攻めた際には「四旬（40日間）経っても勝てなかった」とあり、これは力攻めに固執した結果としての**「消耗戦による戦略的失敗」**を示唆しています。正面からぶつかる「攻む」に対し、時間や心理の裏をかく戦術が「襲う」です。

4. 「襲う（おそう）」：不意を突く機動的・電撃的攻撃

「襲う」は、夜襲や奇襲、背後への攻撃など、敵が防御を整えていない隙を突くアクションです。

- **夜間・黎明の奇襲** ： 麦孟才が「明け方（黎明）」に宇文化及の陣を襲う計画を立てた例や、王世充が「三鼓（真夜中）」に含嘉門を不意に襲った例などが典型的です。
- **不意を突く拠点奪取** ： 劉武周が不意に楡次を襲って陥落させた事例のように、相手が予期せぬタイミングで拠点を奪う際に使われます。
- **背後への掩撃（えんげき）** ： 正面から対峙するのではなく、敵の背後に回り込んで打撃を与える際にもこの言葉が選ばれます。「襲う」の核心は、 **秘匿性とスピード**

にあります。劉蘭成が「敵は備えていない」と判断し、通常の**「倍速」**で進軍して臧君相の陣営を襲撃した例は、機動力を最大化して不意を突くこのアクションの本質をよく表しています。戦術的な打撃が「襲う」であれば、その場にある人や物を奪うという実利に特化した行為が「抄掠」です。

5. 「抄掠（しょうりゃく）」：人畜・物資の具体的略奪行為

「抄掠」は、軍事的な占領よりも、物資や人間を奪い去るという「具体的な獲得行為」に焦点が当てられています。

- **「抄」と「掠」の具体的な動作**：
- **抄（抄む）**：「抄者」と呼ばれる者が、米や野菜、道具などを背負って自陣へ持ち帰る行為。
- **掠（掠む）**：家畜や、薪拾いをしていた人々（樵牧者）を力ずくで連れ去る行為。
- **劉蘭成による北海の事例**：劉蘭成が北海で行った作戦では、奪取の対象が明確に記録されています。
- **家畜**：雑畜（放牧されていた家畜）
- **人員**：樵牧者（薪拾いや放牧に従事していた人々）
- **物資**：米、菜、道具（これらを抄者が背負って運搬した）
- **プロセスの連続性**：突厥が涼州を「寇」した際、結果として「男女数千人を掠めて去った」とあります。これは、領土への侵入（寇）というプロセスの後に、略奪（掠）という実利的な目的が達成される一連の流れを示しています。ここまで見てきた各アクションを、一目で比較できるように整理してみましょう。

6. 総括：軍事用語の体系的比較表

本資料で学んだ概念を、その目的や戦術的特徴から整理すると以下のようになります。| 用語 | 目的 | 主な対象 | 戦術的特徴 || --- | --- | --- | --- || **寇す** | 領土侵犯、攪乱、政治的挑発 | 州、県、辺境地域 | 境界を越えて荒らし回る。**偵察的側面（寇を試みる）**もある。 || **攻む** | 拠点の奪取、物理的陥落 | 城、門、砦、都市 | 衝車や梯子などの攻具を用いた正面突破。長期の包囲戦。 || **襲う** | 奇襲、電撃的打撃、不意打ち | 敵陣、城門、敵の背後 | 夜間・黎明の利用。通常の **倍速** などのスピードと秘匿性を重視。 || **抄掠** | 物資・人員の獲得（実利追求） | 家畜、食糧、非戦闘員 | 奪った物を背負って持ち去る。侵入（寇）の結果として行われる。 |

学習者へのアドバイス　古典史料を読み解く際は、その記述が「正面突破（攻む）」なのか、「不意打ち（襲う）」なのか、あるいは「偵察（寇を試みる）」や「略奪（抄掠）」なのかを意識してください。言葉の使い分けに注目することで、当時の指揮官が直面していた戦況の切迫度や、その決断がもたらした戦略的成否を、より鮮明にイメージできるようになるはずです。